

平城宮北方の調査

—第314-9次

調査区は平城宮北面大垣の北方に位置する（図119）。住宅改築に伴う調査である。1964年に今調査区の約20m西方で第23次調査が行われており、北面大垣に関連する遺構として「北面大垣（SA2300）」や「瓦とバラスを敷いた施設（SX2333）」などが検出されている。

『平城報告Ⅹ』ではSX2333とSA2300との間に遺構がないことから、この間の幅約13mの空地を北面の埴地とし、SX2333は排水施設として埴地を画すると想定している。その後、第34次・191-4次調査においてSX2333推定ラインに該当する部分の調査をおこなっているが、いずれも類似の施設は検出されていない。この点について、第34次調査区内では、奈良時代の遺構が検出されていないことから、遺構が全て削平された可能性もある。他方、第191-4次調査区は北面中門想定地にあたり、そもそもSX2333が存在しなかったことも考慮しなければならないだろう。すなわち、今回の調査はSX2333が埴地を画する施設として北面大垣の北を東西に横切ることが追認されるのかという点で注目された。

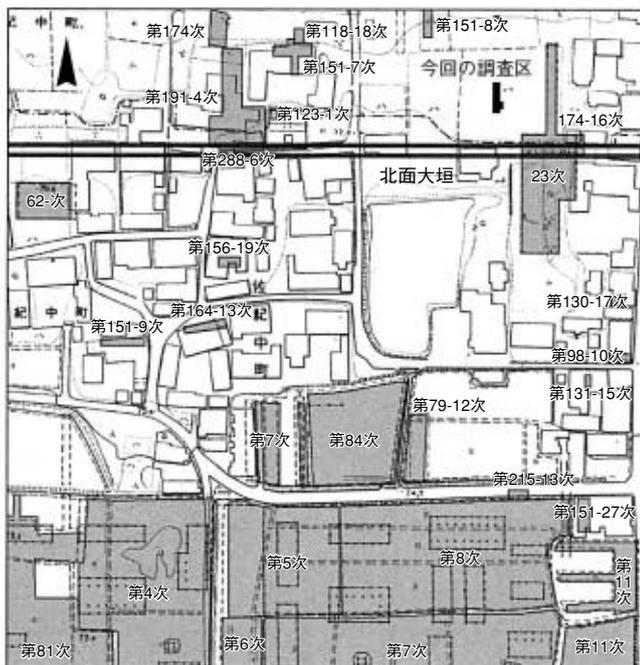


図119 第314-9次調査区と過去の調査区の位置関係

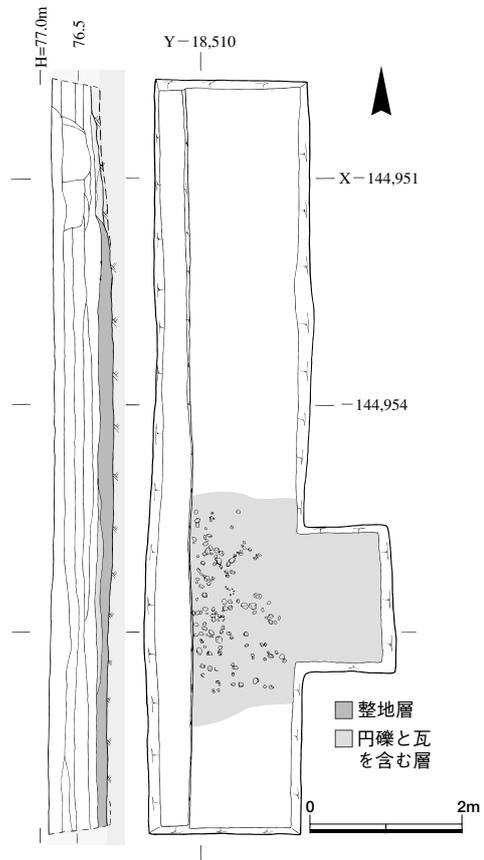


図120 第314-9次調査区遺構平面図・西壁断面図 1:100

調査の結果、調査区南寄りで南北約2mにわたり、整地層を掘り込むかたちで、炭を含み、拳大の円礫と瓦を含む層が検出された（図120のアミ部分）。第23次調査において検出されたSX2333に比べると、瓦、礫が密でないことと、実際の検出位置が想定心よりも若干北に位置することからみて、これがSX2333に連なる遺構であるとは明言しがたい。

しかし、整地層を掘り込むかたちで礫や瓦を含む層が確認される点や、この層が炭を含むなどの点で、第23次調査時のSX2333検出所見と符合する点もある。よって、今回検出された遺構はSX2333が後世の攪乱を受けたものである可能性が高いが、これが「埴地を画する施設」として平城宮北方を東西に横切るものであるのか、確信に足る良好なデータを得たとは言いがたい。

なお、この調査では遺物包含層より瓦と瓦器、整地層より瓦と土師器が出土しているが、いずれも摩滅が著しく、小片かつ少量である。

（神野 恵）